楽しくも奇妙なデザインの本、日本の型紙芸術100点

The book of delightful and strange designs being one hundred facsimile illustrations of the art of the Japanese stencil-cutter / to which the gentle reader is introduced by one Andrew W. Tuer
London ; Leadenhall 〈 KB031/753.81/T 〉

文化ファッション大学院大学教授（近代美術・デザイン史担当）　高木　陽子

ヨーロッパにおける日本文化発信の拠点、パリ日本文化会館では、毎秋、日本文化を紹介する展覧会を開催している。今回は「KATAGAMI-Les pochoirs japonais et le japonisme（型紙―日本の型紙とジャポニスム）」展（2006年10月19日―2007年1月20日、キューレーター：馬渕明子・長崎巌・高木陽子）と銘打ち、型紙と型染めのきもの、そして型紙が世紀転換期のヨーロッパ芸術に及ぼした影響を展示した。本書は、型紙の卓越したデザインをヨーロッパに紹介した初の著書として、本館よりこの展覧会に出品された。

本書が出版された1892年ころまで、ヨーロッパ人は型紙を知らなかった。日本の開国を直接のきっかけとして、1867年パリ万博、1873年のウィーン万博、1878年パリ万博会場には、輸出の主力商品であった、屏風、武具、蒔絵や磁器、根付、櫛、印籠（いんろう）、扇や団扇（うちわ）、竹製品、染織品、紙製品が並び、日本趣味の拡大をもたらした。1870年代にピークを迎えた日本の工芸・雑貨ブームと比較すれば、型紙の紹介は意外なほど遅れているように思われる。型紙の舶載（はくさい）の歴史研究はこれからというレベルである。

型紙は、デザインの教材としてサンプルを収集する目的で19世紀後半に設立された各地の装飾工芸美術館に、数千、数万の単位で収集された。ウィーン（応用美術博物館/現代美術に1万点、民族学博物館に627点）、ドレスデン（国立美術館内の工芸美術館に1890年に1万6000点）、ロンドン（ヴィクトリア＆アルバート美術館に1891年に1500点）、ボストン（ボストン美術館に3000点）、そのほかプラハ、クラクフ、クレーフェルト、レイデン、ミュールーズ、リクサム、リヨン、ヴェネチアの美術館で型紙の存在が確認されている。いつ、どのような目的で収集されたかがわからず、未整理の状態で収蔵されている場合もある。

日本美術商ジークフリート・ビングは、1888年から3年間編集出版した月刊誌「Le Japon artistique（芸術の日本）」で型紙のデザインを紹介した。英・仏・独の3か国語で同時出版されたこの雑誌には、装飾芸術の職人に供すべく豊富な図版が掲載された。そのなかには型紙が“産業のためのモデル modele industriel”“装飾のためのモチーフmotif de

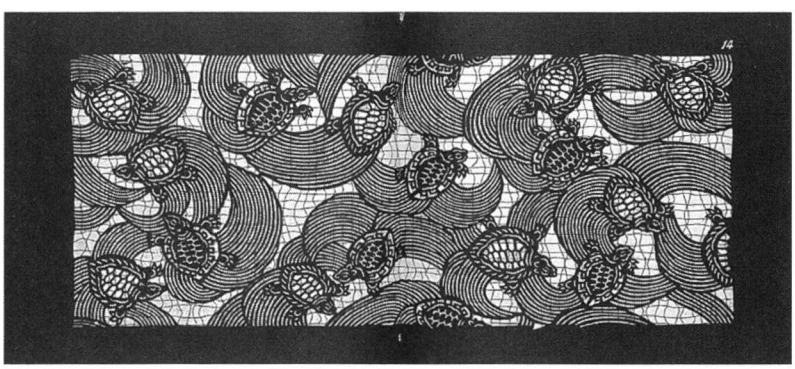

図1：型紙No.14

décor”などと銘打って掲載された。つまり、編集者は型紙の詳細を知らないで掲載していた。

本書は、その直後に英国人Andrew W. Tuer（1838-1900）によって英・仏・独の3か国語で出版された。出版年は明記されていない。しかし、英国日本協会の報告書中の書評では1892年出版と紹介されている[1]。なお、同報告書には、1892年6月15日に行われたハート夫人（Mrs. Ernest Hart）の講演録《Some Japanese industrial art workers（Crape printers）》（pp. 49-66）が掲載されている。1891年に日本を旅行したハート夫人は、型紙に興味を持ち、1891年8月5日「マンチェスター・ガーディアン」紙の記事で初めてKatagamiの語を使っている。

Andrew W. Tuerは、‘Field & Tuer’として70年代に印刷業を開業し、中世風のオールドスタイルの活字で有名なThe Leadenhall Pressを創設した。中世主義の印刷業者が日本の型紙選集を出版した事実は、ヴィクトリア朝時代に日本の造形が中世を彷彿とさせる点で評価されていたことを裏付けている。

本書の構成は、まず、実物の幾何学模様の型紙が口絵として挿入されている。

次に、英文で24ページの解説文、独語訳、仏語訳が続く。各国語の表題紙には、ロンドンやニューヨーク、パリなど世界各地の出版社名が連なっていることから、複数の出版社による大規模な出版事業であったことがわかる。

出版社の並びは、各国語の表題紙によって異なる。たとえば英文の表題誌では5番目に掲載されているパリの出版社Baudry et Cie.が仏語訳の表題紙では筆頭に掲載されている。並び方は、各国語訳の出資額を反映しているのではないか。

次に100点の型紙の複写が掲載されている。No.1～No.40は見開きに1点ずつ、No.41以降は1ページに2点、見開き4点が掲載されている。本書のサイズは20×22cmで見開き図版でほぼ実物大となることから、装飾芸術の職人に向けて図案として提供する意図があったと思われる。実際に本書の図案は、フォルチュニーの室内着のデザインに使われた[図2]。

本書出版の直後から、型紙に関する情報は急速に増大する。ブリンクマン（Justus Brinckmann）の著書『Japanisches Färberschablonen』（Aarau, 1892）のほか、「The Studio」（1893-1964）をはじめとする美術・デザイン誌の紹介記事によって、型紙は急速にヨーロッパに広められ、日本美術愛好家の収集アイテムにもなった。

型紙の、自然の量感と質感と色彩を排除し、線的表現に様式化したデザインは、アール・ヌーヴォーの揺籃（ようらん）の地となったブリュッセル、ウィーン分離派とウィーン工房、そしてパリでも応用された。はじめは、経済性と芸術性に同時に応える技法であったが、やがて20世紀を迎えるころには、モダンな表現となっていたのである。

1）
「Transactions and proceedings of the Japan Society」London, vol.1, 1893 p.9.
一方、『National Union Catalogue Pre-1956 Imprints』によると、1893年出版
Hilerの『Bibliography of costume』によると、1893年出版

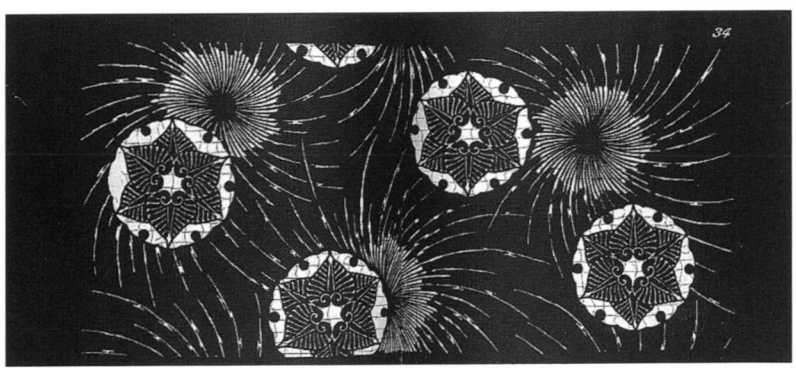

図2：型紙No.34